仮面ライダー剣（ブレイド）　～切札と帽子と本の旅人～

龍牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダー剣（ブレイド）　～切札と帽子と本の旅人～

【Ｎコード】
Ｎ７８６１Ｙ

【作者名】
龍牙

【あらすじ】
決戦と言う過去の終わりから展開される、過去（ＴＶ編）、現在（ヤミ帽編）、未来（ＭｉｓｓｉｎｇＡ編）の三つの時間軸それぞれの時の中で戦う切札の戦士、カメンライダーブレイド『伊達　翔』の物語。これは自サイトで連載している同名の作品の微修正版です。

プロローグ

「全てのアンデットは封印した。…残っているのは、ジョーカー…お前一人だ！」

止む事無く振り続ける雨の中、森の中で彼、『仮面ライダーブレイド』、『伊達　翔』はそう叫んだ。

彼と対峙する相手は最後のアンデッド『ジョーカー』…いや、彼の仲間だった仮面ライダーの一人『仮面ライダーカリス』…『相川始』。瞬き一つせずに構えるその姿に人間らしい物は感じられない。

「…できれば、あんたと戦いたくなんてなかった」

「戦うことでしか…俺とお前は語り合えない」

「言うと思ったよ」

予想していたとは言え突きつけられたのは明らかな拒絶。翔はそれを平然とした態度で受け止めて一言だけそう返す。

何のカードを通してもいないのに『相川　始』は『仮面ライダーカリス』へと変身する。それに答える様に『ブレイバックル』に『A（エース）』のカードを差し込む。既に覚悟は決めていたのだ。迷う必要は無い。

「変身！」

翔は叫び声を上げて『仮面ライダーブレイド』へと変身し、カリスに立ち向かう。

それに対して、カリス…いや、始は…最後のアンデッド『ジョーカー』として、ブレイドを迎え撃つ。

「どうした！？　その程度か！？　いくらお前が手加減しても、俺は…容赦はしない！」

その言葉通り、ジョーカーは情け容赦無く反撃の暇も与えぬよう、何度もブレイドを殴り飛ばす。

『殴られるべきだったんだろう、自分は』そんな考えが浮かぶ。ラウズアブソーバーとキングのカードの二つを使った自身のアンデッド化による方法は思いついていた。だが、それには決定的に時間が足りない。そんな気持ちがブレイドに反撃と回避の意思を奪っていた。

そして、何度目かに繰り出されたジョーカーの攻撃を避け、ブレイドはカウンターに蹴りを叩き込むみ、一旦距離をとる。そして…ジョーカーへと駆け出した。

ジョーカーもブレイドに呼応する様に距離を詰める為、駆け出す。ブレイドもジョーカーも武器は持っておらず、互いに拳で、蹴りで攻撃をぶつけ合っていた。

そんな中でブレイドが動きを止める。攻撃を加え続けられながらの大きく振りかぶっての右ストレート。ラウズカードを読み込んだ様子も無いのに、その拳には彼の持つカード『スペードの６』…『サンダー』の力が宿っている様にも見えた。

そして、翔はブレイドの最後の切り札を切る。

腕のラウズアブソーバーに『Q（クィーン）』のカードを差し込み、『K（キング）』のカードをカードリーダー部分に通す。

『ＡＢＳＯＲＢ　ＱＵＥＥＮ』『ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ　ＫＩＮＧ』

ブレイドのラウズカードが『ギルドラウズカード』へと進化し、全身がアンデットのレリーフが刻まれた黄金の鎧へと進化する。それこそがブレイドの切り札『仮面ライダーブレイド　キングフォーム』

「これで…終わりだ」

キングフォームと成ったブレイドがそう呟き、真上へと手を翳した瞬間に全身のレリーフが輝き、五枚のギルドラウズカードがその手の中に現れた。

『ＳＰＡＤＥ　ＴＷＯ』『ＳＰＡＤＥ　ＴＨＲＥＥ』『ＳＰＡＤＥ　ＦＯＵＲ』『ＳＰＡＤＥ　ＦＩＶＥ』『ＳＰＡＤＥ　ＳＩＸ』

次々に金色の大剣『キングラウザー』の中に収められていく五枚のカード…五枚目の『スペードの６』のカードがキングラウザーに納められた瞬間、

『ストレートフラッシュ』

その『役』は完成する。

ブレイドの手の中に現れるのは一振りの剣…愛剣『ブレイラウザー』。そして、5枚のカードに宿る力を二振りの剣『キングラウザー』と『ブレイラウザー』の二刀へと乗せ、『X』を描く様にジョーカーを切りつける。

それはブレイドにとって、『ロイヤルストレートフラッシュ』を除けば最大の破壊力を持つ技…それが、完全にジョーカーへと決まる。

奇しくも彼の取ったその選択肢は初めて…何も知らずに…ジョーカーの事を何も知らずに、ジョーカーと対峙した時と同じ技の選択だった。

手段を模索する中で、何度考えた事だろうか？　『あの時、何も知らずにジョーカーを封印していれば楽だっただろうか？』と、

だが、幾ら考えた所でそんな『ｉｆ』は存在していない。彼に有るのは目の前の現実のみ。

二刀の一撃を受けたジョーカーはその場に倒れたが、再び立ち上がり、よろよろとブレイドへと向かい前に進む。

「……すまない……」

一言だけ呟き、ブレイドは『プロパーブランク』を投げつける。そして、そのカードはジョーカーの胸の飾りの部分に突き刺さり、光を放ち始める。それを見つめるブレイドは複雑な心境だった。ジョーカーの封印の瞬間。

今まではただ敵を倒したという感覚だけ、強力な敵を倒した感覚は

有っても、そこにこんな気持ちは無かったはずなのだ。

それなのに、最後のアンデットを倒した今は違う……そこに有るのは爽快感ではなく、仲間を犠牲にしてしまったと言う喪失感だけだった。

「……天音ちゃん……」

ラウズカードの中に完全に封印される前に…確かに、そんな声が聞こえた。それはジョーカーとしての言葉ではなく、『相川　始』としての…『人間』としての言葉でそう言った様に聞こえた。

そして、ブレイドの変身が解け、ブレイバックルとラウズアブソーバーが……そして、彼の持つ13枚のラウズカードが落ちる。翔はそんな事にも気付かない様に一歩一歩、幽鬼の様な足取りで、最後のラウズカード『ジョーカー』へと近付いていく。

それを拾い上げ、膝を突き、

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああ！！！」

喉の奥から叫び声を上げた。それは泣いている様にも、叫んでいる様にも聞こえた。そして、そのまま水溜りの中に音を立てて倒れこんだ。

…こうして、このバトルファイトは『全てのアンデッドを封印する』と言う結果を持って、終焉を迎えた…。

だが、この終焉は彼にとっては一つの過程でしかないのだ。
仮面ライダーブレイド『伊達　翔』…彼の物語はこの『終焉』の名を持つ『過程』から始まる。

つづく…

Ｍｉｓｓｉｎｇ Ａ編　序幕

あの戦いから二年、翔が『相川　始』を最後のアンデット『ジョーカー』として封印した時から、そろそろ二年の月日が流れようとしていた。

ブレイバックルも『ＢＯＡＲＤ』へと返却し、自分は仮面ライダーの仮面は外したはずだった。

「外したはずなんだけどな…」

翔は苦笑を浮かべながら手の中で一枚のトランプに似たカードを玩ぶ。

そのカードに書かれているのは、今にも動き出しそうな程リアルに描かれたスペードのマークと一体化したカブトムシの絵と『Ａ』の文字。彼はそのカードの名を知っている。それは『カテゴリーＡ』のアンデットを封印したラウズカード。

二年前の戦いでもっとも、自分が触れていたカードなのだ。

「烏丸所長も何で態々返したはずのブレイバックルとエースのカードを、オレに届けたんだ？」

一年前の旅ではブレイバックルの入った小包を受け取って直に実家に出かけた。それが実質一年以上の長い旅（但し、こっちで過ぎた時間は１時間にも満たなかったようだが）の始まりだった。

久しぶりに実家に帰って突然聞かされたのは婚約者の話と、その婚約者との最悪の出会い。今でこそ両思いと言う恋人同士だが、あの

時の自分では想像も出来なかっただろう。

それはさておき、実家に帰ってから直に『彼女』の姉探しの旅が始まったのだ。ブレイバックルの存在に気づいたのはその旅の中での事。その時は自分の想像を超えた経験を何度も体験した事もあり、ブレイバックルには…再び被る事になった『仮面ライダーブレイド』の仮面にはその中で何度も助けられた。

「…ブレイバックルとカテゴリーAのカードをまたオレに託すか。何を考えてるんだ？」

実際、何を考えているのか理解できない所が多い人でも有ったのだから、そんな事を呟いた所で意味はないだろう。だが、その行動には全て意味が有った。

それなら、自分にブレイバックルとカテゴリーAのカードが送られて来た事にも何か意味が有るとも考えられるが、その意味を問おうにも二度と会う事も無いと思っていた仮面ライダーとしての先輩である橘から一度だけ有った連絡で、翔にブレイドの力を託した烏丸所長は事故で亡くなったと聞いた。

自分が戦い、その中で死んだ故人を悪く言う気はないが、天王寺等と言う奴に比べればよっぽど信用できる。だから、もしかしたら…何らかの理由があって、烏丸所長は自分にブレイバックルを託した。そして、自分の死を予期していた。そうとも考えられる。

「それにしても…」

目の前に置かれたコーラを飲み干し時計を確認する。別に『彼女』とのデートと言う訳ではないが、かつての仲間、進路に付いての相

談があると言う母校の後輩に当たる『仮面ライダー』の一人との待ち合わせなのだ。今日は大学の講義もない、時間は有ることなので、早めに出てきたのだが…。

「早く来過ぎたな」

はっきり言って今日1日何の用事もなく暇だったのだ。約束の適当に時間を潰そうと考えても、新しい雑誌の発売もなく、こうして待ち合わせ場所で缶ジュースを飲んでいる事しか出来ない。

「…済みません、翔さん。こっちからお願いしたのに、待たせてしまって」

自分が考え事をしている間に来たのだろう、声が聞こえてきた方向に視線を向けると、そこにはかつての仲間『仮面ライダーレンゲル』であった少年『風見　クウヤ』がいた。

「気にするな、暇だったからと言って、一時間以上も早く家を出たオレが悪い」

「ええ。それで…」

久し振りに会う仲間との会話を弾ませながら、雑談を交えながら、翔はクウヤの相談に答える。

「…それで、彼女と同じ大学に進むとすると、志望校のランクを一つ落とす訳か」

「…そうなんです。それで、元の志望校にするか…一つ落とすか…それで悩んでるんですよ」

『天王寺　カスミ』…クウヤの幼馴染にして、その姓からも解るように、あの『天王寺』の身内でもある。飛行機事故で本当の両親を失い、天王寺に養女として引き取られたので、血縁関係はないのだが。

彼女を人質にされ、以前の戦いの中で初めて翔がキングフォームを発動された直後、レンゲル用のラウズアブソーバーを持って、クウヤが敵に回った事がある。

「…難しい話だな。守ってやりたい、大切な人か…」

そこまで言うと楽しそうな笑みを浮かべながら、翔は言葉を続ける。

「…実際、オレ達を裏切ってまで守りたかった相手なんだろ、その子は？」

「…そ、そうです…。前は…最初の頃はカテゴリーAに意識を操られて、あいつを傷つけたり…あいつを人質にされて翔さん達と戦ったり…そんな調子でしたから…。だから、どう言う選択をすれば、今度こそ守ってやれるのかが分からなくて…。って、そうじゃなくて！？」

思いっきり翔に乗せられて彼女に対する惚気話をしてしまった事に気がつき、顔を真っ赤にしながら、目の前の先輩を睨む、クウヤ。

「…そうだ、翔さん。昨日、虎太郎さんに会って聞いたんですけど、今度、栗原さんの所で天音ちゃんの誕生日パーティーをするそうですから…」

「そうか…。じゃあ、オレも参加するから、詳しい日程を聞いておかないとな」

クウヤと会話を続けながら、最初の質問の答えを考えていく。その時だった。突然、悲鳴が聞こえたのは。何かと思って視線を向けてみると、その視線の先にいたのは……人を襲うアンデッド。

「あれって、アンデッド！？」

「…ローカスト、カプリコーン、モス、ゼブラ、バッファロー…それに…嶋さんに…キング」

ローカスト、カプリコーン、モス、ゼブラ、バッファローと言ったアンデッド達…そして、その奥にはクラブとスペードのカテゴリーキング…タランチュラアンデッドとコーカサスビートルアンデッドまで存在していた。

「…そんな…なんでアンデッドが！？」

「クウヤ、お前は襲われている人達を避難させろ」

クウヤへと支持を出して翔はポケットの中からブレイバックルを取り出し、『カテゴリーA』のカードを差し込む。

「翔さんは何を…っ！？　それって…ブレイバックル！？　どうして…」

「詳しい話は後だ…。変身！！！」

『Ｔｕｒｎ　Ｕｐ』

そう叫び、ベルトのバックル部分を回転させると、前方に蒼いカブトムシとスペードを象った紋章が現れ、その中を潜り抜け、『仮面ライダーブレイド』へと変身し、アンデッドの中へと突っ込んでいく。

（…一体でも梃子摺った奴も多い…なら、最初に狙うのは、ローカストかリザード、ライオン）

ライオンアンデッドとリザードアンデッドの姿は近くには見えず、仕方なく唯一狙いの中で近くにいたローカストアンデッドへと向かっていく。

「はぁ！！！」

不意打ち気味な一撃が別の人間を襲っていて無防備なローカストアンデッドの背中に吸い込まれ、ローカストアンデッドが襲っていた人はすぐにクウヤが避難させる。

それを確認した瞬間、今度はブレイラウザーで休みなく、連続で切り付ける。5回、6回、7回と連続で叩き込まれ、最後の一撃が吸い込まれた瞬間、ローカストアンデッドは倒れ、バックル部分が開き、そこにブレイドが投げたラウズカードに吸い込まれる様に再封印される。

「まずは一体」

そう言って手元に戻ってきたカードを受け止める。これである程度の最高攻撃力は確保した。本来なら、『ジャガーアンデッド』や『ディアーアンデッド』と言ったローカストアンデッドのカードとのコンボを可能にするアンデッドを優先的に倒して行きたい所だが、

生憎とそのアンデッド達はこの場には居ない。

ブレイドの仮面の中で未だに暴れつづけるアンデッドを睨み付け、次の相手に向かおうとした時だった。三台のバイクが向かってきたのは。

バイクを止めると、そのバイクに乗っていた三人は逃げ惑う人々とは逆に…アンデッドの方に向かって歩き出す。

三人とも自分と同じ年…いや、僅かながら上の年齢に見える。1人は誠実そうな好青年、1人は生意気そうな青年、そしてもう1人は気の強そうな女性。

明らかに彼等三人の顔には怯えは無く、その手には何かの機械らしき物を持っている。遠目から見てそれはレンゲルの物に近いライダーのバックル。

元々、例外である『カリス』を除外して、『ギャレン』、『ブレイド』、『レンゲル』と言った順に新型になっている。見た事のないライダーの変身システムがレンゲルよりも新しい物なら、と言うのなら、最新型に位置するレンゲルの物に近いのにも頷ける。

翔の推測を肯定する様にそれに何かのカードをセットし、アンデッドの群れに迷いなく近づいていく。

「まさか…あれも…。」

ブレイドが戦っている間に変身できないなりに力になろうと、怪我をした人に肩を貸して戦場から離れていくクウヤがそれを見てつぶやく。

そして、三人はかつてクウヤの持っていた物と同様にバックルを腰に当て、ベルトとして装着される。

「「「変身」」」

『ＯＰＥＮ　ＵＰ』

バックルを開き、紋章のような壁が展開し、三人を細部が違う同型タイプの『仮面ライダー』へと変身させる。

「仮面ライダー…オレの…それもレンゲルと同じ…」

「オレ達の同類か。クウヤ、おまえは早く離れろ！」

何処か憎しみを込めた目で三人の仮面ライダーを睨み付けながら、クウヤはブレイドの言葉に従ってその場から離れていく。

（仮面ライダーの量産型…いや、量産型の先行試作型って所か？）

翔がそう考えるのにも理由がある。三人の姿はほぼ同じ外見、マスクの部分は特徴的なＡの文字を連想させる飾りとダイアを連想させる部分を中央に持つ。胸の辺りにも同じ様な飾りがつけられている。

誠実そうな青年が黄色、生意気そうな青年が緑、そして女性が赤と、アーマーの色こそ違うが、従来のライダーと比べると量産性を高めた様に見える。

「っ！？　待て！」

三人のライダーが相手にしているアンデッド達の中からコーカサスとタランチュラと言ったカテゴリーキングが逃げ出していく。慌て

てそれを追い掛けるブレイドだが、突然の衝撃に思わず歩みを止める。

「…この攻撃…こいつか」

カテゴリーキング二体は既に見失った。だが、自分にダメージを与えた相手はまだ残っていることは確信できる。
カテゴリーキングを逃がす為の足止めと殿を勤めた相手の立つ正面を睨みつける。ブレイブの目の前には、特に厄介な能力を持ったアンデッド『スカラベアンデッド』が立ち塞がっていた。

「やっぱりな…」

スカラベアンデッドは本来、ジョーカーも含めた53体のアンデッドの中でカテゴリーキングやジョーカーさえも持たない『神の領域』と言う点に近づいていると言える相手である。

それは『時間停止』…カテゴリージャック、クィーン、キングと言った上級アンデッドやジョーカーでさえ持ち得なかった能力を持った、有る意味では上級アンデッド以上の最強のアンデッドと言えるだろう。だが、

「…あいつ等は見逃したんだ…お前だけは封印させてもらう！」

ブレイラウザーの刃を外側へと向け、腰の辺りに添えると言う独特の構えで、右足を前に出し体重をかける。それが日本刀ならば居合の体制に近いと言えるだろう。

自身の正面に立つスカラベアンデッドを睨みつけながら、ブレイドは少しずつ前へと…スカラベアンデッドとの距離を詰めていく…。

そして、ボード部分を展開させ、先ほど封印した『スペードの５』、『キックローカスト』のカードを取り出す。

ブレイドの全身を強い衝撃が襲う。次間停止化での攻撃が繰り返されているのだろう、そして、スカラベアンデッドの位置は変わっているが、大きくは動いていない。

（…時間停止の能力…確かに厄介だけどな…。お前が殿と言うのは間違いだったな）

何者かに命令されて行動している…いや、操られていると言う可能性も有る以上、推測では有るが…奴の後方へと向かわせない為にブレイドの行動を妨害していると推測できる。なら、新しい命令が下る前に自分の攻撃範囲に入ることが出来れば…。

今のスカラベアンデッドの能力では時間停止した所で、回避不能の攻撃でしかない…故に。

《ＫＩＣＫ》

電子音と共に居合を連想させる一太刀が僅かにスカラベアンデッドの体に切り傷をつける。だが、それは飽く迄牽制でしかない。

「はあ！」

一瞬だけスカラベアンデッドが怯んだ隙にローカストアンデッドの力の宿ったキック、『ローカストキック』を打ち込む。それにより、一瞬だけスカラベアンデッドの動きが止まる。

《ＫＩＣＫ》

「これで！」

二度目のローカストキックを叩き込み、そのままブレイラウザーで横一線に切りつける。

《ＫＩＣＫ》

「終わりだ！」

止めとばかりに三度目のローカストキックが飛び蹴りで叩き付けられる。それによって吹き飛ばされたスカラベアンデッドが倒れ、バックル部分が展開する。そして、

「…『スペードの１０』か…。厄介なアンデッドが早い内に封印できたな。それにしても…」

先ほど封印したカード『スペードの１０』と『スペードの５』の二枚のラウズカードをブレイラウザーのボード部分へと収納し、逃げた二体のアンデッドを今から追った所で無駄と判断すると、ブレイバックルを外しブレイドの姿から元の姿へと戻る。

（…烏丸所長…あんたはもしかしてこうなる事を分かっていて、オレにブレイバックルを届けたのか？　だったら…あんたは…）

叫びそうになった『自分の死さえも予想の内だったのか！？』と言う言葉を飲み込む。結果として既に烏丸は死んでいるのだ。今更何を考えた所で過ぎ去った事実に『ｉｆ』は無い。何を考えた所でそれは何の意味もない。

先ほどまで三人の新しい仮面ライダーとアンデッド達が戦っていた場所へと視線を向けると既に戦いは終わっている。そこには戦いが有った事を示す様に一枚だけライオンの絵が書かれた『スペードの3』のカードが残されていた。
あの場にライオンアンデッドが居なかったことから考えて、それは既に別の場所であの新しい仮面ライダー達によって封印された物なのだろう。

「やめておくか…。それにしても…新しい仮面ライダー。一体誰が…」

翔は空へと視線を向ける。全ては…今、この瞬間を持って、新しい戦いの始まりを迎えたのだった。

つづく…

ＭｉｓｓｉｎｇＡ編　弐幕

アンデッドの開放…本来ならば一万年に一度のはずのバトルファイト…それは本来よりも早い周期で起こり、人類はアンデッドの脅威に曝される事となった。それは、一人の男の欲望の為に。

その戦いの中で、一人の少女を守る為に『氷雪の蜘蛛の騎士』はその欲望に利用され、新たな力を与えられ、己が師と呼ぶ『紫電の甲虫の騎士』と刃を交えた。

その戦いは紫電の甲虫の騎士が最後の切札を封印する事により、戦いは終わった。だが、その平穏も僅か二年で破られる事となる。再び封印されていた５０体のアンデッドが開放され、『剣のカード』は己の主の元へと座したまま、ジョーカーのカードは未だ封印されたまま…。

「これで良し。あとは…」

先日の戦いの折に拾ったラウズカード…自分の愛用していたスートのカード、何故か二枚も存在している『スペード３』『ビートライオン』のカードを二枚拾い上げ、一枚をポケットの中に…もう一枚をブレイバックルと共に仕舞う。

そして、テーブの上に置いてある切り抜いた紙や鋏等を片付けると、

箒を持ってきて床に落ちている紙の破片を履き始める。他にも汚れが気になったのか、翔はそのまま部屋の掃除を始める。

「ん？　これは…手紙？」

部屋の掃除をしていた翔は床に落ちた、一年前にブレイバックルが届けられた際の箱を拾い上げる。一年間も埃を被っていた箱。それはブレイバックルと共に烏丸の形見となってしまい今まで捨てられずに居たのだ。

そして、それは床に落ちた時、その衝撃で被っていた埃と共に二重底になっていた部分が外れて落ちていた。

入っていた物は僅か一枚の手紙…捨てようとすれば、気付いたかもしれない。…気付かずに捨てていたかもしれない。形見となってしまい捨てられずにいた事で、それは結果的に気付く切欠さえも得られなかった。だが、今それを見つけ出す事が出来たのだ。

手紙に書かれている文字は間違い無く、送り主である烏丸所長の者である事は間違いない。書かれている言葉…それは『もう一枚のジョーカー』と、『伝説種の不死者（アンデッド）』…そして、同封されていたのは…

「…ラウズカード！？　この絵は…鳥と……ケルベロス！？　…でも、絵柄が違う。」

一枚は前回のバトルファイトの中で作り上げられた人造のカテゴリーAのアンデッド、『ケルベロス』の絵が書かれたラウズカード。そして、もう一枚は“赤い鳥”が書かれたラウズカード…そのスートは奇しくも『スペード』…そして、書かれている文字は…。

「って、拙い、誕生日パーティーの準備に集まる予定だった！？」
それを確認しようとした時その事に気が着くと、その二枚のカードをブレイラウザーと共にポケットの中に突っ込み、部屋を後にした。

再び開放されたアンデッドと、先ほど発見した烏丸からの手紙、そして…新世代の（新しい）ライダー達の存在と、幾つもの疑問を感じながら翔とクウヤは『ＪＡＣＡＲＡＮＤＡ』で天音の誕生日パーティーの飾り付けをしていた。

「それで、天音ちゃんには暫く会えなかったけど、どう？」

飾り付けをしながら、近くでパーティーの飾り付けをしていた黒いロングヘアーに眼鏡をかけた少女『天王寺　カスミ』にクウヤはそう問い掛ける。

天王寺の死によって再び保護者が居なくなった彼女は、ＪＡＣＡＲＡＮＤＡで住み込みでアルバイトさせてもらっている。
最も、処分する事の出来た彼女が受け継いだ天王寺の遺産は、彼女の学費を差し引いても彼女一人がある程度生活していくのには十分過ぎる程の金額なのだから、住み込みのアルバイトと言うよりも、居候させてもらっているような物。…その為に彼女の希望で給料は受け取っていない。

「……うん、クウヤちゃん。…それなんだけど…」

「どうしたんだ？」

クウヤの問いに言葉を濁す幼馴染の態度に不信感を感じたのか…クウヤは心配そうに問いかける。

「それがね…最近ちょっと、あの子おかしいの」

「うん」

クウヤの問いにカスミに代わって答えたのは天音の母の『栗原　遥香』。目を伏せながら、寂しそうに遥香とカスミはそう答えたのだった。

『…寂しそう、か…。翔さん、それってやっぱり…』

『ああ。きっと、始さんが居なくなった事が原因なんだろうな』

クウヤは翔の方へと近づいていき小声でそう話しかける。心当たりは二人共知っていた。彼女達もそれが原因だと思っているはず。それは間違いなく、仮面ライダーの仲間の一人、『仮面ライダーカリス』であった『相川　始』が居なくなった事なのだろう。

だが、始が居なくなった原因も知っている二人としては何も言えないのだ。……特に最後のアンデッド『ジョーカー』として彼を封印した翔には…。

「…クウヤ…お前は仮面ライダーに戻りたいか？」

「いえ。もう必要無い力なら持つ必要は無い…そう思ってます」

「同感だけどな…結果的に、昨日はこれ（ブレイバックル）が有ったから、出来た事も多いんだよな」

「ライダーである事は良い思い出だけじゃないですけどね…」

『仮面ライダーである事』は『尋常ならざる力を得る事』なのだ。それは諸刃の剣である事は翔も、クウヤも理解している。

使えばどんな敵でも倒せる圧倒的な『力』。同時にそれに取り込まれ、溺れ、利用され、堕ちて行く。一歩間違えれば二度と引き返せない場所へと飲み込まれていくであろう危険な力。

クウヤはレンゲルのカテゴリーAであるスパイダーアンデッドの邪悪な意思と、天王寺の野望に利用され堕ちかけた。翔もキングフォームの…カテゴリーKの力に飲み込まれ暴走しかけた。

「そうだな。楽しい事も有ったけど…辛い事も多かったからな…」

クウヤも翔自身も戻る事ができた。だから、全てが終わった後、二人はブレイバックルとレンゲルバックルを一切の躊躇無く返却したのだ。だが、翔の手元には逃れられぬ呪いの様に、ブレイバックルは戻ってきていた。

「そうですね。…オレがレンゲルだったせいでろ、あいつ（カスミ）を傷付けたんですからね」

一度は自分自身が…二度目はクウヤを利用しようとした養父に道具として利用されて。もう、その天王寺も居ない。アンデッドも居ない。二度と彼女を傷付けた力を…『仮面ライダーレンゲル』の仮面を被る必要は無い。

全ては過ぎ去った『過去』の事になった…そのはずだった。

「でも、戦いは終わってなかった…か」

「そうですね」

二人の表情は険しい物へと代わる。つい先日、全て封印したはずのアンデッドは再び現われ、翔は再び仮面ライダーブレイドへと戻った。それは二人の目の前で広がっていた現実の光景なのだ。

「…なんだか…現実だって言うのに、信じられませんね」

「ああ。信じられないのはオレも同じだ」

悩みぬいた結果…一人の少女の悲しみの結果…やっと得ることの出来た平穏…それが崩されてしまったという事。自分達の努力と苦悩の全てが否定された気分になる。

二人がそんな会話を交わしているとドアベルが鳴り、翔よりも年上に見える三人の若者達が入って来た。

「お前達は…」

「どうしてここに？」

翔は入って来た三人を睨みつける。

「僕が招待したんだ」

三人の後ろから新たに一人の男が入ってくる。『白井　虎太郎』…仮面ライダーの戦いをサポートしてくれた者の一人で、ここに居る遥香の弟でも有る。翔達仮面ライダーの活躍を書いた本『仮面ライダーと言う名の仮面』が一躍ベストセラーとなった青年。

「二人は知らないだろうけど、この人達も仮面ライダーなんだよ。昔のライダーと今のライダー。やっぱり、仲良くした方が良いんじゃないかな？　それに、みんなで対談でもやってもらうと、新しい本のネタになるんだよねー」

「…対談…ですか？」

「…一応、始めましてって言うべきか？」

虎太郎からの紹介を受けた後、不信感を露にしている翔とクウヤ、三人の間に妙にギスギスとした空気が流れる。

「白井さんから聞きましたよ。君がブレイドだったのか。お会いできて光栄です」

タレ目気味の誠実そうな青年。…先日ブレイドに似た武器を持ったライダーに変身していた青年がそう言う。

「しっかし、想像してたのとは全然違うよな。そっちのは、レンゲルだろ？」

「なんだと」

生意気そうな青年の言葉に、クウヤが怒りを露にしながら声をかける。

「ほーんと、なーんか頼りなーい」

最後に女はあからさまに見下した風に言う。面と向かって話すのは始めてだが、彼等が自分達に対して良い印象を抱いてない事がわかる。もっと正確に言えば、『過去のライダー』である翔達を完全に見下している。

「ロートルの素人よりはマシだとは思うけどな」

流石に頭に来たのか翔はそう言い返した。

「なんだと、誰がロートルだ」

「これは失礼。もう耳も悪くされていたんですね。ねえ、そこの…オ・バ・サ・ン♪」

明らかにバカにした態度で女の方へと向き直り、そう言いきった。

「な、なんですって!?」

「ちょ、ちょっと、落ち着けって!」

翔の言葉に激昂する女を誠実そうな青年と生意気そうな青年が押さえる。

「それで、デザイン手抜きの量産型ライダーが何の用だ？　って、聞くまでも無いか…これだろう？」

翔はポケットの中から取り出した『他のカードと分けていたビート

ライオン』のカードを、押さえられている女の前で、ひらひらと見せびらかす。それを奪い取ろうとした女の手を素早く避け一歩後に下がる。

「ええ。残念ですが、伊達君。我々は忙しいんだ。今日もそのカードを返してもらいに来ただけだ。返してもらえるかな？」

「それはいいけど…その前に後の人を紹介してもらえないか？」

本当にカードの回収が目的なのだろう、女を押さえるのをもう一人に任せて、誠実そうな青年が前に出て言いきる。翔はその青年…いや、入り口の向こう側へと視線を向けながらそう告げた。

「そうですか、それでは紹介しますよ先輩「そっちの方が年上なんだから、先輩は止めてくれ、オレはまだ１９なんだ。」…では、伊達君、風見君、紹介しますよ、俺達のチーフを」

誠実そうな青年がそう言うとドアベルが鳴り、一人の男が入って来た。その人物は、

「やっぱり、貴方だったのか…。久しぶりですね、『橘さん』」

かつての『仮面ライダーギャレン』、『橘　朔也』だった。

「気付いていたのか、伊達？」

「…システム自身は最新型のクウヤのレンゲルの発展系と言えるライダーシステムに対して、ギャレンに近いデザインなんで…もしかしてと言う程度には」

翔の言葉を聞き、着いて来いと言う態度で踵を返し出ていく朔也と三人…翔はクウヤへと視線を向ける。クウヤは翔に視線を向けられると軽く頷き、遥香に虎太郎、カスミの三人に『ちょっと出てきます』と言い、店の外へと出ていった。

そんな二人を追いかけて虎太郎も店の外へと出ていく。残された二人は天音の誕生日前に起こった波瀾に小さく溜息をつくのだった。…これが、新たなる最大の波瀾の幕開けになるなど予想もせずに。

翔達が案内されたのは、都会から少し離れた所に相応しく、余り高くない白い建物。ガラス張りの部分が多く、それなりにおしゃれな建物である。

「53体のアンデッドを封印し、我々のライダーとしての仕事は終わった」

「…終わったはずだったと言うべきですね。現状を考えると…まさかとは思いますけど…『もう一体のジョーカー』でも居たんですか？」

「そんな…まさか…」

「その通りだ。アンデッドがまだ一体残っていたんだ。もう一体のジョーカーがな。何故気が付いた？」

翔とクウヤの言葉に橘は完結に答えた。…その声は何処か感情と言う物を忘れ去ってしまったかのように。

「ラウズカードはトランプと同じ。ダイヤ、ハート、クラブ、スペードの四種に１であるＡから始まり１３のキングまでの１３枚…合計５２枚にジョーカーを加えた５３枚だけでなく、『もう一枚のジョーカー』が入りゲームに使うワンセットのデッキになる。故にアンデッドの中にも、もう一体ジョーカーがいるのでは？　と、そんな可能性も考えていただけです」

翔は冷静に答える。そう、ジョーカーは二体いるのではと言う可能性も考えていた。最後に封印されたジョーカー以外のアンデッドであるダイヤのカテゴリーＫを封印した時、大破壊が起こった事で否定されたと思っていた。そして、それは自分だけでなく、亡くなった烏丸も考えていたのだろう。

「流石だな。私と烏丸所長が全てのカードを永遠に封印しようとした、あの日」

朔也の口から語られるのは、その日の…運命の日の事実。まるで、彼等が来る事が分かっていた様に待ち構えていた『白いジョーカー』に襲撃を受けたと言う。『全てのアンデッドを封印した』と思っていた二人にとって、それは予想外のことで有り…。

「烏丸所長は命を落とし、ジョーカーとダイヤのカテゴリーＡを除く全てのアンデッドが開放されてしまった。なんとか、半数は人知れず封印できたのだが…」

「そんな…そんな大事な事、何でオレ達に言ってくれなかったんですか、橘さん！？」

「無駄だ。ブレイドとレンゲルに変身する為に必要なカテゴリーAも解き放たれてしまったんだ。君達はもう変身する事はできない」

クウヤの言葉に朔也は冷たく言いきる。だが、翔もクウヤもその言葉に引っかかる物を感じていた。そう、ブレイドに変身する為のカテゴリーA『ビートルアンデッド』は開放されていない。何故なら、現在進行形で翔の手元に有るのだから。

（…じゃあ、オレにブレイバックルとカテゴリーAを届けたのは、烏丸所長だけの意思？）

「って事で、今は私達が仮面ライダーって訳」

そんな翔の心境を知ってか知らずか、朔也は話しを進める。

「改めて紹介しよう。『志村　純一』」

誠実そうな青年が小さく会釈する。

「『禍木　慎』」

生意気そうな青年が半歩前に出る。

「『三輪　夏美』君だ」

最後に紹介された女が皮肉気な笑みを浮かべ、

「よろしく。そして、サヨナラ」

「そうだな、力が要らないなら、サヨウナラだな。オレ達はオレ達で勝手にやらせてもらうよ、オバサン」

「いい加減にしろよ、何時まで先輩面してんだ、お前。ッ！？」

翔の言葉に突っかかって来た慎の頬を僅かに切って、朔也の元へと一枚のカードを投げ渡す。

「よせよ。所詮君は過去の人間。もう仮面ライダーじゃ…それは！？」

翔へと突っかかる慎を諌めながら、言いきろうとした純一に翔はそれを見せる事で答える。

「悪いけど…オレは『今も』仮面ライダーだ。」

ブレイバックルとカテゴリーAのカードを見せながら翔はそう言いきる。

「…図に乗るなよ」

「喧嘩なら相手になるぞ」

そんな売られた喧嘩を高く買った様な態度を見せる翔を睨みつけ、バックルを取り出しながらそう言う慎。当の翔は挑発する様に薄らと笑みを浮かべながら、バックルへカテゴリーAのカードを指し込む。

「大変です、翔さん！」

「大変だ、伊達君！」

先ほどから会話に参加していなかったクウヤと虎太郎が慌てた様に声をかける。完全に新世代の三人を意識の外へと追いやり、翔は彼らの方に視線を向ける。

「どうした？」

「天音ちゃんが警察に捕まったって！」

「それで、遥香さんが迎えに良くそうなんで、今はカスミが留守番しているそうです」

「…なんだって？」

同時刻、有るビルの屋上

５３種のアンデッド…そのどれとも似ても似つかない人型の異形の影が町を見下ろしている。その姿…それは、伝説の中にのみ存在している神獣『麒麟』に似ていた。

つづく…

ＭｉｓｓｉｎｇＡ編　参幕

「ご招待どうも。それで…お前は何者で、オレに何の用だ？」

ブレイラウザーを眼前の相手に向けて、翔…仮面ライダーブレイドは『麒麟』の姿のアンデッドを一瞥しながら、そう問い掛ける。

「……」

『麒麟』のアンデッドはブレイドの問いかけに答えずに後を振り返り、一度だけ『着いて来い』とでも言う様にブレイドへと視線を向けて何処かへと走り去っていく。

「っ！？　待て！」

ブレイドは専用マシンを持たない今のブレイドでも、十分に追跡できる程度の速度で走り去った『麒麟』のアンデッドを追いかけて行く。

ブレイドが麒麟のアンデッドと対峙した時より、時は僅かに遡る。

「あっ、オレ、カスミの方を手伝ってきます」

「ああ、パーティーの準備も任せたぞ」

そう言って翔と虎太郎は、ＪＡＣＡＲＡＮＤＡへと戻って行くクウ

ヤと別れて警察署へと向かう。

さて、その後警察署へと着いた翔達だが…翔は思わず頭痛でも押さえる様に頭を抱えてしまっていた。

「…取り敢えず…オレはお前に対して、『バカ』とでも言って置くべきか…？」

目の前に居る彼よりも二つ程年下のショートカットの少女を、アンデッドと対峙した時に近い程の鋭さを持った視線で睨みつけながらそう呟く。

「え？　奈菜（なな）！？」

己の義妹『伊達　奈菜（なな）』へと向けてそう叫ぶ。

「バカは酷いと思うな、翔。私と翔の仲じゃない」

「……。どう言う仲だ？　変な誤解を招くような事を言うな」

彼女との関係は、現義妹であり、元従兄妹と言う関係で、旧姓は『広瀬　奈菜』。ＢＯＡＲＤの研究員だった『広瀬　義人』の娘であり、同時にかつて仮面ライダーとして戦ってきた頃の協力者の一人である。

そんな事も有り、翔自身、最初にブレイドになった時は身内の不始末の後始末と言う感覚だった事は否定できない。

さて、彼女は最年少でＢＯＡＲＤの研究員となり、アンデッドサーチャーを作り上げ、ＢＯＡＲＤの壊滅後も虎太郎と共に翔をサポー

トしてくれた自他ともに認める天才らしいのだが…興味に向いた事は何にでも首を突っ込みたがる性格故に時々こうして警察に保護される事も多々有り、その都度に翔が彼女を引取りに行く手間を掛けさせられているのだ。

「いやだなぁ、私と翔は義兄妹であって元従兄妹…どっちにしても、他人じゃ無いのは確かだとは思うけどね」

翔に向かってそう言うと奈菜は虎太郎に向き直り、

「あ、奈菜ちゃん久しぶり」

「やあ、虎太郎、久しぶりだね。君の書いた本は読ませてもらったよ。でも、惜しむべきはもう少し、『剣崎　一真』を格好良く書くべきだったね、折角翔をモデルにしたんだから、私がモデルになったヒロインの『広瀬　栞』と…」

ポカン！

無言で奈菜を殴る翔だった。

「痛いな。なにをするんだ、翔？」

「お前は…他に言うべき事があるんじゃないのか？　大体…あれに関してはオレの希望で別人に変えてもらったんだ。…大体、何を期待した？」

「さあね、君を別の誰かに取られた身の上としては本の中でくらい、

君と恋人になりたかったと思っただけだよ」

「はぁ…」

こんな風に翔に対して好意を向けて来る彼女なのだが、彼には現在は恋人が居る訳である。ベストセラーとなった『仮面ライダーと言う名の仮面』の執筆中、何度かそんな事をリクエストしていて、彼女は直接顔を合わせた事は無いが何気に虎太郎と接触しているのも彼女である。

どうでも良いが、付け加えるならば、同時に虎太郎の本の中のレンゲルこと『上条　睦月』もクウヤの希望で本の通りの人間になったし、レンゲル用のラウズアブソーバーに関しても存在しない事になっている。

「ああ。虎太郎、天音ちゃんの誕生パーティーには是非私も出席させてもらうよ」

「…こいつは…」

己の義妹ながら、彼女のマイペースさには時々頭が痛くなる思いの翔だった。流石に実の父の記憶を持った改造実験体（トライアル）と戦った時はそんな彼女の弱い部分を見たしたのだが…。

「ああ、それと…奈菜（こいつ）の事は悪かったな。」

そう言って後に居る少女達に振りかえる。

「気にしなくてもいいよ、翔にも用事が有っただろうし。でも、どうしてここに？」

「ああ、知り合いの誕生日パーティーの準備を手伝ってたんだけど、ちょっとここに来る事になってな…」

膝まで伸びる黒い長髪の少女、『東　葉月』にそう告げると、

「そうだね、葉月義姉さん達も一緒にどう？　天音ちゃんの誕生パーティーもみんなで祝って上げた方が良いだろうからね」

「ボク達も参加させてもらっても良いのかな？」

「多分大丈夫だろう、オレと奈菜の共通の知り合いだしな。オレから葉月達の事は頼んで見る」

最後に『ただし、誕生日プレゼントは持ってきてくれ』と付け加えておく。

「うん」

「あ～、翔久しぶり～！」

そう言って飛びついてくる金色の髪の少女の存在に気付き、翔は近くに居た虎太郎の肩を掴み、身代わりにする。

「え、うわぁー！」

「もう、なんで避けるのよ！」

「飛びかかってこられたら避けるだろう…普通は」

「姉さん」

身代わりにされた虎太郎を突き飛ばして不服そうに抗議する少女に呆れた様に溜息を着きながら金色の髪の少女にそう呟く、翔と葉月の二人だった。

「う～、翔も葉月も酷い～」

翔にだけ記憶が残る旅の仲間…現在はどうやったかは不明だが、現在は葉月の姉を仮の姿として東家の長女として生活している、『リリス』こと『東　沙織（さおり）』は不満気に二人に向かってそう言った。

なお、リリスは幾つものパラレルワールドを『本』として管理している『図書館世界』の管理人らしい。

姉を探し様々な世界を渡る葉月の旅に同行し、そこでリリスとは出会った。

葉月の旅に協力する事になった翔だがそれは無事に連れ戻す事に成功したのだが、幸か不幸か葉月はその旅の記憶を失っていた。だが、旅の中で芽生えた翔への好意だけは残っていた。

（…どうでも言いが…今更ながら、オレ達世界のタイトルが気になる事だな）

そんな事を考えてしまうが、本当にどうでも良い事である。

「まあ兎も角…沙織さんも初美さんも久しぶりです」

そう言って最後の一人…『東　初美』も含めてそう挨拶する。彼女、

初美も手話で『久しぶり』と返してくれた。彼女が葉月の旅の目的で有った人物であり、本来の名前は『イブ』と言うらしい。

有る事情から葉月と彼女達が一緒に居られる時間は成人までと長くは無いのだが…それでも、葉月はその別れの運命を忘れてしまっているし、翔はその僅かな間に少しでも彼女達に楽しい思い出が残ってくれれば良いと思っている。

「そう言う訳で…虎太郎さん、天音ちゃんの誕生日パーティー、葉月達も参加させてもらっていいですか？」

「うん、姉さんもいいって言ってくれるよ」

「ありがとうございます。ボク達も参加させてもらいます」

翔の言葉に虎太郎が答えると、葉月がそう礼を言った。

「わ～なんだか、楽しみ♪」

楽しそうにそう言っているリリスと、嬉しそうに微笑んでいる初美の二人…そんな時、奥の方から罵声が聞こえてきた。

「い、今のは…？」

「もう、何よ、あの子！」

「…そう言わないで上げてくれ…本当はあんな子じゃないはずだ…」

「「…翔…」」

警察署を出ながらリリスが不機嫌そうにそう言った。彼女の気持ちも理解できるし、その原因を作り出してしまったのが、自分自身の決断で有る為にそれが翔には余計に辛いのだ。

だから、辛そうな翔は天音を弁護した。…そして、そんな翔の表情を見ながら葉月と奈菜は心配そうに彼の名前を呼ぶ。

天音が捕まった理由は窃盗罪。とある百貨店で万引きを働いたと言う。初犯と言う事も有り、今回は簡単に釈放されたが、天音に反省の色は無かった。それどころか、迎えに来た遥香達に対して刺々しい態度をとっていた。

「大きくなったね、天音ちゃん」

場の雰囲気を変え様と翔が天音に話しかけたが、

「もう！　ウザイんだよ！　放っといて！　……ホント、ウザイ！」

今にも泣き出しそうな声で翔に言い放ったのだ。…リリスが不機嫌なのは翔に対して天音がそんな態度を取ったからなのだろうが。

「そんな訳には行かないよ。心配なんだよ、オレも虎太郎さん達も…」

「嘘！　どうでもいいと思ってるのに！？　あんたも虎太郎もお母さんも！　…始さんだって…」

「っ！？」

その名前を聞いた瞬間、翔の表情が暗くなった。

「始さん、私の事守るとか言っといて、突然居なくなって…」

翔だけじゃない…『始』と言う名前が出た瞬間から奈菜も虎太郎も、始の事を知っている人間は全員表情が沈んでいる。

「翔…始さんって、誰？」

意を決して葉月が翔にそう問い掛けた。

「…オレ達の仲間だ…」

心から辛そうに翔は葉月の問いにそう答える。

「っ！？　悪い、みんな…先に帰っていてくれ、オレも後からＪＡＣＡＲＡＮＤＡに行く。葉月、悪いけど、オレの変わりに虎太郎さ

ん達を手伝ってやってくれ」

「あっ、翔！」

そう叫んで翔は走り出し、ビルの影に隠れるとブレイバックルを取り出すとラウズカードを刺し込み、それを腰に装着し、

（…どこに居るかは知らないが…オレだけを狙って殺気を送ってくるなんてな…。オレだけを呼んでいるって言う訳か）

そう思いながら翔は不適な笑みを浮かべる。

「良いだろう…その招待…受けてやろう。変身！」

『Ｔｕｒｎ　Ｕｐ』

仮面ライダーブレイドへと変身し走り出すし…物語の冒頭へと繋がる訳である。

麒麟に似たアンデッドを追いかけていたブレイドは何時の間にか廃工場へと辿り着いていた。

「どこに…？　っ！？」

周囲の気配を探ろうとしたブレイドは何かに気が付き後に跳ぶと、

今まで彼が立っていた床に数枚のカードが突き刺さった。

「ラウズカード！？」

『…使え…仮面ライダー』

優しげだが何処か強制力がある声が響くと、そこから一体のアンデッド…ブレイドが追い掛けていた『麒麟』のアンデッドがその姿を現した。

「…アンデッド…しかも、上級！？」

上級アンデッド…書くスートにＪ～Ｋまでの三体…合計１２体存在し、人間としての姿を持ち、人語を操るだけでなく近い知能を持ち、通常の２～１０までのアンデッドよりも高い戦闘力を持つアンデッド。特にライダーの変身に重要なカテゴリーＡ（エース）は強大な力を持つカテゴリーＫ（キング）に対抗する為に生み出されたと言う説まで存在する。それほど強力なアンデッドを指す。……極一部を除いて（『フォー！！！＃　ｂｙスペードのＱ』）

謎のアンデッドに注意を払いながら、ブレイドは床に突き刺さっているカードを引きぬくとそのカードを見て驚愕を覚えた。

（？のカードの…６と９…。）

『サンダー』と『マッハ』のカードがそこにあった。

「これもだ。」

そう言って新たに投げ渡したカードを受け止めると…

「スペードスートのカード！？　それも…キング以外…全部…」

カテゴリーキングを除く残り全てのスペードのカードがそこにはあった。

「キングフォームとやらは着かないだろうが、これで十分に全力は出せるだろう…仮面ライダー」

「どう言うつもりだ？」

「…お前の全力を確かめたい…それだけだ。我が名は『麒麟』の祖となりし、『チーリンアンデッド』」

刀を取り出しそれを構えると麒麟のアンデッド『チーリンアンデッド』は己の名を名乗る。

「仮面ライダーブレイド…伊達翔…受けて立とう。だけど…戦う前にこれだけは答えてもらおうか？」

「なんだ？」

翔の中の疑問は多くある。『麒麟』のアンデッドが存在するのか？　何故１２体だけしか存在しないはずの上級アンデッドが他に存在しているのか？　しかも、ライダーでもジョーカーでもないのにどうやってアンデッドを封印したのか？　…だが…これだけは最初に確かめておきたかった。

「何が目的だ？　何故オレにカードを渡した？　オレの力を確かめたいと言うのはどう言う意味だ？」

封印されているアンデッドの中にはカテゴリーKは無いとは言え、JとQの上級アンデッドも含まれていた。…戦ったからカテゴリーJ（ジャック）のイーグルアンデッドが強敵なのは自分が一番理解している。

だからこそ、自分の手持ちとキングを除くスペードスートの全てのアンデッドを倒した程のアンデッドが何の目的で自分の前に現われたのか…何故、自分の実力を確かめたいと言うのか、それが疑問だった？

「……簡単な話だ……。カードを渡したのはそれらも含めての全力を見たい。そして、お前の実力を確かめたいのは…嶋と同朋カテゴリーナイトの一人が認めたお前の力を私自身で確かめたい」

チーリンアンデッドはそこまで言うと己の武器である刀を構えながら、ブレイドへと視線を向け、ゆっくりと距離を詰める。

「……」

ブレイドも無言のままチーリンアンデッドの動きの全てを見逃さない様に全力で注意を払いながらも、その言葉を聞き逃さないように注意を払う。

「そして…お前に託すだけの価値があるか確かめるだけだ…。我のカテゴリーペイジの力と、この世界の生命（いのち）の全てを！！！」

「カテゴリーペイジにナイト…？　（烏丸所長が送ってきてくれたカードの事か？）」

チーリンアンデッドから語られる聞き覚えのない単語を呟く。

「もう質問はないようだな…？　では…行くぞ！！！」

「来い！！！」

それぞれの得物を構え、ブレイドとチーリンアンデッドの姿が交差する。

つづく…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7861y/

仮面ライダー剣（ブレイド）　～切札と帽子と本の旅人～

2011年11月23日14時47分発行